

要旨

本研究では、英語において作家名がその人物の著書を指示する言語現象 (e.g. I hate to read *Heidegger*. / *Proust* is tough to read. /...) を語彙意味論の観点から取り上げる。Lakoff and Johnson (1980) をはじめとする数多くの先行研究は件の現象を AUTHOR FOR WORKS としたメトニミーの一種として分析してきたが、このタイプの意味変化は (i) 照応詞の選択; (ii) くびき語法の容認性という2つの点において、その他のメトニミーとは大きく異なる振舞いを見せる。このことから、本研究では、従来のメトニミーによる分析を棄却し、*Yeats* や *Plato* といった作家名に人物としての読みと著書としての読みという少なくとも2つの下位意義、特にファセットを認めることを提案する。

1. はじめに

本研究では、英語で作家名がその人物の著書を指示する言語現象を語彙意味論の観点から取り上げる。Lakoff and Johnson (1980) 以降、メトニミーというラベルの下で分析されることが非常に多いこの現象は、少なくとも2つの点において文法的な振舞いが他のメトニミーと大きく異なっている。本研究の目的は、これらの特異性から、当該現象をメトニミーとして扱うのではなく、ファセットによって扱うことを提案することにある。本稿の構成としては、まず2節で先行研究における当該現象の取り扱いを概観し、3節で AUTHOR FOR WORKS の特異性を確認した後に、続く4節でメトニミーにとって代わる理論的道具立てとしてファセットを導入し、5節で本研究が提案するファセットによる分析の有用性を示す。本研究のまとめは最終の6節で行う。

2. 先行研究

メトニミーを扱う多くの代表的な先行研究 (e.g. Lakoff and Johnson 1980; Croft 1993; Langacker 1993; Kövecses and Radden 1998; Littlemore 2015) が、その具体例として (1a-e) を挙げていることから、作家名がその人物の著書を指示する言語現象を AUTHOR FOR WORKS としたラベルの下でメトニミーとして扱うことは幅広く受け入れられてきたと言える。

- | | |
|---|--------------------------------|
| (1) a. I hate to read Heidegger. | (Lakoff and Johnson 1980: 38) |
| b. Proust is tough to read. | (Croft 1993: 348) |
| c. She bought Lakoff and Johnson, used and in paper, for just \$1.50. | (Langacker 1993: 29) |
| d. We are reading Shakespeare. | (Kövecses and Radden 1998: 57) |
| e. The kind of character we often find in Dickens. | (Littlemore 2015: 6) |

もちろん、これらのすべての先行研究が後述する AUTHOR FOR WORKS の特異性を無視しているわけではない。例えば、Stirling (1996) は、照応の観点から AUTHOR FOR WORKS の特異性を指摘した最初期の研究の一つと言えるだろう。同様に、山本 (2010, 2012, 2013) や Terhalle (2023) も一言でメトニ

ミーと言っても、タイプによって文法的な振舞いが異なることを指摘している。しかし、これらの研究も、そのような文法的な差異をメトニミーに下位分類を設けることによって解決しようとしており、この点においても AUTHOR FOR WORKS がメトニミーであるというのが前提となっていることが見てとれる。

3. AUTHOR FOR WORKS の特異性

本節では、先行研究で AUTHOR FOR WORKS とともにメトニミーとして一括りにされてきた ORDER FOR CUSTOMER を (i) 照応詞の選択; (ii) くびき語法の容認性という 2 つの観点から比較することで、AUTHOR FOR WORKS の特異性を確認する。そして、これらの特異性は件の現象がメトニミーによるものではないこと示唆するものであると主張する。

そのためには、具体的な観察に入る前に曖昧性 (generality)¹ と両義性 (ambiguity) の区別を導入しておく必要がある。(2a) における *cousin* と (2b) における *bank* いずれも解釈が一つに定まらないという点において共通はしているが、両者の間には確かな違いがある。

- (2) a. Sue is visiting her cousin. [general]
b. We finally reached the bank. [ambiguous]

(Cruse 1986: 51; 筆者強調)

(2a) の *cousin* は性別や年齢、*Sue* なる人物との関係性など多くの点において不明確であるが、この文を解釈するうえで十分な情報は提供していると言える。しかし、(2b) の *bank* は銀行を指すのか、それとも河川の土手を指すのか決定しないことには、この文を正しく解釈することはできない。

また、Cruse (1986: 77) は語彙形式 (lexical form) と単一の意義 (sense) の結びつきを語彙単位 (lexical unit) と呼んでいるが、曖昧性と両義性はこの語彙単位を決める上で重要な要素である。曖昧性の場合、*cousin* における従兄弟や従姉妹という読みはあくまでも一つの意義であり、したがって語彙形式と結びついて一つの語彙単位を形成する。その一方で、両義性の場合、*bank* の銀行という意義と土手という意義は異なったものであり、したがってそれぞれ別々の語彙単位を形成しているとされる。

以上の議論を踏まえて、以降 AUTHOR FOR WORKS の特異性を示していくこととする。

3.1. 照応詞の選択

一旦メトニミー的な解釈を受けた表現をその後の文脈で字義通りに解釈し直すことは難しい²。実際、

¹ Murphy (2010) では *vagueness* という術語が充てられている。

² その反対に一旦字義的な解釈を受けた表現をその後の文脈でメトニミー的に解釈することは ORDER FOR CUSTOMER であっても、AUTHOR FOR WORKS であっても可能である。

- (i) a. The mushroom omelet was too spicy. He left without paying.
b. Plato is a great author. It is on the top shelf.

(Stirling 1996: 82; 筆者強調)

(3) では先行文脈によって *the mushroom omelet* はマッシュルームオムレツを注文した客というメトニミ的解釈を受けているが、この場合、その解釈を継続して照応詞に *he* を選択することは全く問題ないが、マッシュルームオムレツそのものという字義通りの解釈に戻って *it* を選択することは不自然である。

(3) a. The mushroom omelet left without paying his bill. He jumped into a taxi.

b. The mushroom omelet left without paying his bill. It was inedible.

(Stirling 1996: 82; 筆者強調)

その一方で、以下の例における *Yeats* は先行文脈でイエイツの著作という解釈を受けているはずであるが、(4a) のようにそのままの解釈を継続し照応詞に *it* を選択することも、(4b) のように人物の解釈に戻って *he* を選択することも可能である。

(4) a. Yeats is widely read even though most of it is out of print.

b. Yeats is widely read although he has been dead for over 50 years.

(Nunberg 1995: 124; 筆者強調)

言い換えれば、(3b) の場合、先行詞 *the mushroom omelet* は [the person who ordered a mushroom omelet] を意味しており、この中から [a mushroom omelet] のみを抜き出して照応詞 *it* で受けることはできないが、(4b) の場合、先行詞 *Yeats* が意味する [a book written by Yeats] から [Yeats] のみを抜き出して照応詞 *he* で受けることができるという違いが見受けられる。

Postal (1969) によると、語は「照応の島 (anaphoric island)」を形成するために、その語の意味に含まれる一部の要素のみを取り出して照応詞で受けることはできない。したがって、*orphan* は確かに [a child whose parents are dead] という意味ではあるが、このうちの [parents] のみを抜き出して *them* で受けた (5) は容認されない。

(5) *Max is an orphan and he deeply misses them.

(Postal 1969: 206; 筆者強調)

ここで Postal 自身は「語」に対して明確な定義を与えていないが、Cruse (1986) が言うところの語彙単位をその定義として採用するとすれば、*the mushroom omelet* ↔ [the person who ordered a mushroom omelet] は語彙単位としての地位を獲得しているが、*Yeats* ↔ [a book written by Yeats] は語彙単位としての地位を獲得していないということが言えるだろう。このことは、[the person who ordered a mushroom omelet] は単一の意義として認定できるが、[a book written by Yeats] は単一の意義として認定できないと言い換えることができる。

3.2. くびき語法の容認性

また、Cruse (1986: 61-62) や Murphy (2010: 86-87) が語彙の両義性と曖昧性を峻別するためのテストの一つとして挙げるくびき語法の容認性においても両者は異なった振舞いを見せる。(6a) のように、*the ham sandwich* のメトニミー的な意味に対応する *is at table 7* と字義的な意味に対応する *is ready to serve now* を並列させることはできない (Cruse 2004: 77-78)。

- (6) a. *The ham sandwich is at table 7 and is ready to serve now.
b. The ham sandwich is at table 7 and is getting impatient.

(Cruse 2004: 78)

- (7) Roth is Jewish and widely read.

(Nunberg 1995: 123)

しかし、(7) のように AUTHOR FOR WORKS の場合、*Roth* に対して字義的な意味に対応する *is Jewish* とメトニミー的な意味に対応する (*is*) *widely read* を並列させても全く問題はない。

同様の対立は Fauconnier (1994) や Stirling (1996) が挙げる以下の例でも確認できる。(8) の例では、いずれも主語である *the omelet* と *Plato* に対して主節はメトニミー的な解釈を、関係節は字義通りの解釈をそれぞれ要求しているが、(8b) のみが容認される (cf. 西村 2008: 82)。

- (8) a. *The omelet, which was too spicy, left in a hurry.
b. Plato, who was a great man, is on the top shelf.

(Fauconnier 1994: 9)

- (9) a. *The mushroom omelet was too spicy. It left without paying.
b. Plato is a great author. He is on the top shelf.

(Stirling 1996: 82; 筆者強調)

(9) では、先行文脈における *the mushroom omelet* と *Plato* の字義的な解釈に合わせて、照応詞に *it* と *he* がそれぞれ選択されているにもかかわらず、(9b) はメトニミー的な解釈を指定する述語を迎えることが可能である。

このように AUTHOR FOR WORKS がくびき語法のテストで認可されてしまうことを踏まえると、作家名における人物読みと著作読みという 2 つの解釈は語彙の両義性によるものではなく、曖昧性によるものであると考える必要が出てくる³。

4. ファセットによる分析の提案

以上の観察の結果から、*Yeats* や *Plato* が曖昧性をはらんだ語彙単位であるとした場合、*Yeats* や *Plato*

³ 加えて、*Do you like Pato?* といった文を解釈するうえで、*Plato* が人物を指すのか、それとも著書を指すのか決定せずとも大きな問題とならないことも、*Plato* の曖昧性を担保する一つの証拠となるだろう (cf. 西村 2008: 81-82)。

の人物としての読みと著作としての読みは単なる下位意義 (subsense) ということになる。Croft and Cruse (2004: Ch.5) は、この下位意義のバリエーションとしてファセット (facet) とマイクロセンス (microsense) を挙げているが、それぞれの定義は以下の通りである。

(10) **ファセット:**

Facets are distinguishable components of a global whole, but they are not capable of being subsumed under a hyperonym.

(Croft and Cruse 2004: 116)

(11) **マイクロセンス:**

Microsenses are distinct sense units of a word that occur in different contexts and whose default construals stand in a relation of mutual incompatibility at the same hierarchical level[.]

(Croft and Cruse 2004: 126-127)

ファセットの具体例の一つとしては、*book* における物理的な側面 (e.g. a heavy book) と内容的な側面 (e.g. an interesting book) という下位意義が挙げられ、マイクロセンスの具体例としては、*card* のクレジットカード、トランプ、名刺などの文脈に応じて選択される下位意義などが挙げられる (cf. Cruse 2000, 2004, 2006; Croft and Cruse 2004; 神原 2021)。

ここで、*Yeats* や *Plato* における2つの読みとその両方をカバーする上位語 (hyperonym) が存在しないこと、及びそれらの読みが同一の階層に位置していないことを踏まえると、このような2つの読みは下位意義の中でもファセットであると判断することになるだろう。したがって、本研究では *Yeats* や *Plato* に人物としてのファセットと著作としてのファセットという少なくとも2つ下位意義を認めることを提案する。

5. ファセットによる分析の有用性

本研究が提案するファセットによる分析の最大の利点は、前述の特異性を問題なく説明できるところにある。

第一に、先行詞と照応詞において活性化されるファセットが異なるということも往々にして起こりうる。(12-13) の *committee* や *group* といった集合名詞 (collective noun) も組織のファセットとその構成要素のファセットという2つの下位意義を持っているとみなすことができるだろうが、ここでは先行詞は組織のファセットから単数扱いとなっているが、照応詞は構成要素のファセットから複数扱いされ、*they* が選択されている。

(12) The committee has not yet decided how they should react to the Governor's letter.

(Quirk et al. 1985: 759; 筆者強調)

(13) The group gave its first concert in June and they are now planning a tour.

(Swan 2005; 526; 筆者強調)

(14) Yeats is widely read although he has been dead for over 50 years.

(=(4b))

(4b) で確認した AUTHOR FOR WORKS の特異性も同様に、先行詞は著作のファセットから *is widely read* という述語を迎えているが、その照応詞は人物のファセットから *has been dead for over 50 years* という述語を迎えるだけでなく、代名詞も *he* が選択されていると明快に分析される。

第二に、単なる下位意義であるファセットの場合、異なるファセットに対応する述語を並列させても全く問題はない (Cruse 2000: 117; Geeraerts and Peirsman 2011)。その証拠として、(15) では、*book* の物理的な側面と呼応する *thick* と内容的な側面と呼応する *boring* が並列されているが問題なく許容される。

(15) The book is thick as well as boring.

(Geeraerts and Peirsman 2011: 96)

(16) The friendly bank in the High Street that was founded in 1575 was blown up last night by terrorists.

(Cruse 2000: 117)

類例として (16) では、*friendly* と *was founded in 1575* と *was blown up last night by terrorists* がそれぞれ *bank* の異なるファセットを問題なく活性化していることが見てとれる。したがって、*Yeats* や *Plato* に 2 つのファセットを認めることで、くびき語法の容認性という特異性も問題なく分析される。

6. おわりに

本研究では、従来メトニミーとして分析されてきた AUTHOR FOR WORKS における (i) 照応詞の選択; (ii) くびき語法の容認性という 2 つの特異性から、*Yeats* や *Plato* が曖昧な意味をはらんだ語彙単位であり、[a book written by Yeats] や [a book written by Plato] といった 2 つの読みは単なるその下位意義であることを主張した上で、当該現象をファセットによって分析することを提案した。

本研究でも示してきたように、ファセットは下位意義、メトニミーは完全な意義に属する現象であり、両者は根本的に異なるものである (cf. 神原 2021: 108)。しかし、そのような本質的な差異を無視して、ファセットとメトニミーはその類似性からしばしば関連して論じられてきた (e.g. Cruse 2004; Paradis 2004)。その点、本研究は今後このような「ファセットとメトニミーの誤謬」を解消する一助となることが期待される。

参考文献

Croft, William. 1993. The role of domains in the interpretation of metaphors and metonymies. *Cognitive Linguistics* 4(4): 335-370.

Croft, William, and D. Alan Cruse. 2004. *Cognitive Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.

Cruse, D. Alan. 1986. *Lexical Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.

Cruse, D. Alan. 2000. *Meaning in Language: An Introduction to Semantics and Pragmatics*. Oxford: Oxford University Press.

Cruse, D. Alan. 2004. Lexical facets and metonymy. *Ilha do Desterro* 47: 73-96.

- Cruse, D. Alan. 2006. *A Glossary of Semantics and Pragmatics*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Fauconnier, Gilles. 1994. *Mental Spaces: Aspects of Meaning Construction in Natural Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Geeraerts, Dirk, and Yves Peirsman. 2011. Zones, Facets, and Prototype-based Metonymy. In Réka Benczes, Antonio Barcelona, Francisco José Ruiz de Mendoza Ibáñez (eds.), *Defining Metonymy in Cognitive Linguistics. Towards a Consensus View*, 89-124. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Kövecses, Zoltán, and Günter Radden. 1998. Metonymy: Developing a cognitive linguistic view. *Cognitive Linguistics* 9(1): 37-77.
- Lakoff, George, and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1993. Reference-point constructions. *Cognitive Linguistics* 4(1): 1-38.
- Littlimore, Jeannette. 2015. *Metonymy: Hidden Shortcuts in Language, Thought and Communication*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Murphy, M. Lynne. 2010. *Lexical Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nunberg, Geoffrey. 1995. Transfers of Meaning. *Journal of Semantics* 12(2): 109-132.
- Paradis, Cartina. 2004. Where Does Metonymy Stop? Senses, Facets, and Active Zones. *Metaphor and Symbol* 19(4): 245-264.
- Postal, Paul M. 1969. Anaphoric Islands. *Papers from the Fifth Regional Meeting of Chicago Linguistic Society*: 205-239, Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Terhalle, Anselm L. 2023. *Metonymy in Frames: The Role of Functional Relations in Contiguity-Based Semantic Shifts of Nouns*. Berlin/Boston: Düsseldorf University Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Stirling, Lesley. 1996. Metonymy and Anaphora. *Belgian journal of linguistics* 10(1): 69-88.
- Swan, Micheal. 2009. *Practical English Usage* (3rd edition). Oxford: Oxford University Press.
- 神原一帆. 2021. 「フレーム意味論にもとづく名詞の意味分析」京都大学 人間・環境学研究科 博士論文.
- 西村義樹. 2008. 「換喩の認知言語学」, 森雄一・西村義樹・山田進・米山三明 (編) 『ことばのダイナミズム』 71-88. 東京: くろしお出版.
- 山本幸一. 2010. 「メトニミーの下位区分: 代名詞の照応現象の違いを通して」『日本認知言語学会論文集』 10: 140-148.
- 山本幸一. 2012. 「メトニミーの2タイプ: 参照点構造の精緻化を通して」『日本認知言語学会論文集』 12: 211-222.
- 山本幸一. 2013. 「2つのタイプのメトニミーと参照点構造: メトニミー成立の必要・十分条件」『認知言語学論考』 11: 347-386.